

歴史を語る建物たち

庄内編
(第8回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

光丘文庫（酒田市）



日光山公園に隣接する、日枝神社などがあるうっそうとした緑の中に、入母屋造の鉄筋コンクリート建築がある。大正14年に建てられた光丘文庫で、現在は酒田市直立図書館の分館として、古文書などの歴史的書籍を所蔵している。平成8年に、酒田市指定有形文化財に指定された。

本間光丘以来、百数十年の悲願

酒田市史などによると、光丘文庫が建てられたきっかけは、大正7年に、「公益の祖」と言われる本間家3代光丘に対して、国から贈位が行われたことによる。大正10年、酒田町長(当時)を会長とする「本間光丘翁頌徳会」(略称)が組織され、大正12年には8代本間光弥が、図書館建設のため蔵書1万数千冊と建設維持費10万円(現在のおよそ数億円)を頌徳会に寄贈した。これを受けて、頌徳会では財団法人光丘文庫を設立し、大正14年に図書館機能を持つ「光丘文庫」が開館した。さかのぼること百数十年前、3代光丘は、旅人の危難を救うために宿泊寺を建立し、そこに経蔵を設けて

博識の住職を招き、人々の学問の場にしたいという思いを抱いていた。今でいう図書館である。しかし、幕府への再三の懇願にもかかわらず、新寺造営停止の政策により果たすことができなかった。

その遺志を、8代光弥が継いで実現させたわけであ



大正14年10月14日に、皇太子裕仁親王(後の昭和天皇)が台臨された。わずか15分の滞在であったが、光丘文庫にとっては名誉なことであった。

出典:「目でみる酒田市史」(酒田市)

り、寄贈にあたって光弥は、「有益なる図書を蒐集して公衆の閲覧に供し、学術の研修、国運の発展に資したい」と述べたと伝えられている。

なお、光丘文庫の設計は、内務省(当時)技師の角南隆、工事は森山善平が請け負った。角南と森山はその後、北野天満宮宝物殿(昭和2年)や太宰府天満宮宝物殿(昭和3年)などの建設でもコンビを組んでいるが、一緒に仕事をした光丘文庫の建設で息が合ったのかもしれない。

ヘレン・ケラーも来館

光丘文庫の開館に合わせて決められた「事務取扱い心得」の1つに、「一般来館者に対し親切に接客するはもちろん、特に盲人、児童および婦女子に対しては、もっとも注意を有すること」がある。館内には盲人閲覧室もあり、目が不自由な方のための点字本の充実度は全国でも指折りであった。昭和23年には、来酒したヘレン・ケラーもここを訪れている。また、昭和5年には山形県博物学会第1回総会が光丘文庫で開催され、著名な植物学者である、東京帝国大学(当時)の牧野富太郎博士が講演を行った。光丘文庫で調査員を務める田村真一氏は、「光丘文庫は酒田の文化の象徴であり、発信地であったと思います」と話す。

昭和25年に図書館法が制定されると、酒田市は光丘文庫の建物と蔵書の一部を借りて、酒田市直立図書館を設置した。そして、昭和33年には、(財)光丘文庫が建物および蔵書を酒田市に寄付し、すべての事業を酒田市に引き継いで解散した。これにより、光丘文庫は「酒田市直立光丘図書館」と改称された。

一方、昭和57年に新設された酒田市総合文化センター内に酒田市直立中央図書館が設置されると、市立光丘図書館は、主に古文書などを保管する「酒田市直立光丘文庫」(分館的存在)となり、今日に至っている。

かつて、カウンターなど一般の図書館機能を備えていたところは展示スペースとなっているが、閲覧室などは、ほぼそのまま残っていることから、学生時代に市立光丘図書館時代の閲覧室で勉強したという方々が、フラッと訪れることもあるそうだ(入館は無料)。田村調査員も、市立光丘図書館で勉強した1人だが、「思い出はありますが、仕事が忙しいので感傷に浸る余裕はありませんね」と笑う。

蔵書のクオリティが重要

展示スペースでやや目を引くのが、石原莞爾(軍人)や大川周明(法学博士)らの旧蔵書だ。特に、石原莞爾はドイツ駐在中、ナポレオン(作戦術)に関する書籍を中心に、多くの洋書を購入し、帰国してもそれは続いた。その1,200冊を超える膨大な洋書も、光丘文庫の書庫に所蔵されている。

なお、誤解を恐れず言えば、石原莞爾も大川周明も、

共に歴史上の人物ではあるが、思想家などとしての人物評価は、現在でも大きく分かれている。

しかし、中山英行文庫長は、「彼らの人物評価と光丘文庫は一切関係がありません。ただ、彼らの旧蔵書は、客観的に見て価値のあるものが多いので、ここで大切に保管しているだけです」と言い切る。

田村調査員も、「光丘文庫には全国から研究者が来ます。実際、研究者に教えられて蔵書の価値がさらに分かることもあります。重要なのは蔵書のクオリティで、それだけのものを所蔵しているという自負はあります」と話す。

また、観光面については、お二方とも「観光客がここを訪れるのは歓迎だが、光丘文庫の第一義的な役割は蔵書の保管なので、積極的にPRするつもりはない」という点で一致していた。

光丘文庫の役割は、あくまで「図書館」なのである。

休館後の行方

もっとも、光丘文庫は歴史的建造物ゆえ、老朽化や耐震性の問題は避けられず、蔵書は今年の8月頃から順次、市役所中町庁舎に移転される。移転が完了するのは11月頃で、移転が完了したら、スタッフも移動し、中町庁舎に「光丘文庫」が誕生する。現在の光丘文庫は「休館」となり、施錠される。田村調査員は、「今の光丘文庫は、建物も雰囲気も周囲の環境になじんでいます」と、チラリと本音を見せつつも、「光丘文庫が中町庁舎に移っても、自分の仕事は蔵書をより良い状態で保管することです。現在の光丘文庫の“その後”について、とやかく言う立場にはありません」ときっぱり語ってくれた。

休館後の建物をどうするかは、市でもまったく未定だという。しかし、考えてみれば、何万冊とも知れぬ貴重な蔵書を、ほとんど欠けたり汚したりすることなく90年余りも預かってきた“重圧”は相当なものだっただろう。

休館後はしばらく休息してもらい、いずれまた鍵が開く日を楽しみに待つとしよう。

(東北公益文科大学特任講師・山口泰史)

天井までびっしりと、古文書などが本棚に並べられ、外に立ち入り禁止だが、撮影許可をいただいた(筆者撮影)。

